

「父と母」

齋藤 邦子さん（昭和 18 年生まれ）

私は福島の片田舎で終戦間近の昭和十八年に生まれました。私が二才の時父は三十一才の若さで硫黄島で玉砕しました。

死亡通知から数年後に帰ってきた父は小さな桐の箱に入った一握りの砂でした。

父の戦地からの手紙どれにも「お国のために戦っている」と書かれてありました。軍人の妻子として明かるく正しく生きよとありました。

二十年前姉と硫黄島墓参の機会があり、飛行機の中で姉から父出征の時二才の私の頭をなでて「邦子大きくなっているよ」との記憶を話してくれました。

現在の硫黄島は穏やかなエメラルド色した海咲きみだれる花々、あの悲惨な出来事は信じられない平和な島となっています。

しかし一周すると一夜にして山半分が弾丸で砕かれた^{すりばち}播針山、壕の入口の無数の弾丸痕、火炎銃で焼かれた壕内をこの目で体で感じてふるえた事を忘れることが出来ません。

アメリカは三日で落とすと責めた硫黄島でした。日本軍は援軍もなく一ヶ月の間「一日でも長く本国の為に戦い」二万予の尊い若い命がなくなりました。

あれから八十年近い今、あの出来事を忘れているのか不安です。

今奇しくも朝ドラでの出征で「バンザイ」と送り出される場面がありました。遠き昔赤紙（みなさんわかりますか）が届き三日後の父の出征。となり部落への挨拶で何ひとつとうちゃんと話ができなかったと泣いて話してくれた母を思い出します。

戦争ほど愚かな事はありません。地球は一つです。守ってゆくのは人間です。

かあちゃん今大好きなとうちゃんと笑っていますか。

とうちゃん私はもうとうちゃんの倍の人生を倅に生きています。昔とうちゃんの親友が私の顔をみて和伸（父の名前）にそっくりだと泣かれた事があります。

とうちゃん、私の命ある限り^{かぎ}私と一緒にです。そして「良く頑張ったと頭をなでて下さい」

とうちゃん

かあちゃん ありがとうございます。

令和6年7月3日 寄稿